

戦国史研究の  
第一人者・小和田哲男氏の

# 城探訪

監修・文 小和田哲男

おわた てつお / 1944年、静岡県生まれ。静岡大学  
名誉教授。戦国時代研究の第一人者。「知れば知るほ  
ど面白い 戦国の城 攻めと守り」(実業之日本社)、  
「知識ゼロからの日本の城入門」(幻冬舎)、「戦国の  
城」(学研新書)など著書多数。

## 月山富田城は なぜ名城に 数えられるのか？

山陰の覇者・出雲尼子一族が居城とした月山富田城は、廃城から400年経った今なお、  
研究者の間で名城として讃えられている。月山富田城の魅力とは一体何か？

戦国史研究の第一人者・小和田哲男氏が専門家の視点から徹底解説する。

# 名城ポイント1

## 戦国の城と近世の城が共存する 全国でも稀有な城郭

### 戦国の城を再利用しながら 近世城郭へと改修される

戦国史を研究する者にとつて、月山富田城は聖地といつてよい。それは、この月山富田城を舞台として西日本の戦国時代がはじまったからである。

出雲の守護代だった尼子経久が、下剋上によつて守護京極政経を逐つて戦国大名にのし上がった文明18年(1486)が西日本における戦国時代の幕開けとされ、その経久の居城が月山富田城だった。

城は、現在、島根県安来市広瀬町に位置し、国指定史跡として整備が進められている。比高、すなわち麓

からの高さが約160メートルで、典型的な山城である。

私自身、子どものころ、子ども向けの山中鹿介の本を読んで、尼子家再興に白らの一生を捧げたその生き方に共鳴し、学生時代から月山富田城には何度も足を運んできた。研究者になつてからは、東日本の戦国大名第一号の北条早雲(伊勢宗瑞)との対比から、尼子経久の居城という視点で、調査に何度も訪れている。はじめのころは、今のように整備されていなかったので、草ぼうぼうの中、蛇を心配しながら本丸まで上がったことを覚えている。

城は室町時代、出雲の守護として近江の京極氏が入り、その京極氏の家臣で、やはり近江出身の尼子持久が守護代になつて月山富田城を居城とし、その子清定、さらにその子経久と、城を大きくするとともに勢力を拡大していった。出雲は全国有数の鉄の生産地であり、その鉄の積出港美保関を押さえ、守護代でありながら、主家である守護京極氏を凌駕し、ついに戦国大名化に成功したのである。

尼子経久の時代、その勢力範囲は、東は因幡・播磨、西は石見・備後ま

で、実に11カ国におよんだという。

その後、やはり大勢力を誇つた大内氏との戦い、さらに、毛利氏との戦いの舞台となつたのもこの城だった。私が、月山富田城の魅力と考えている一つは、尼子氏時代の戦国の城と、その後の近世の城とが共存している点である。尼子氏が滅びたあと、時、毛利氏の支配下に入り、「毛利内川」の一人、吉川広家が入り、戦国の城を少しずつ近世の城に改修しているが、本格的な近世城郭への移行は、堀尾忠氏が慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの論功行賞で遠江の浜松から移つてからである。

堀尾忠氏は父吉晴とともに月山富田城を近世城郭に造り替えているが、その際、尼子氏時代の戦国の城も残り、再利用していたのである。ふつう、このような場合、古い戦国の城は破壊されたり、埋められたりするケースが多いが、月山富田城の場合、本丸・二の丸・三の丸の山城部分についてはそのまま利用し、一部石垣を積み程度で、戦国の城を残しておいてくれたのである。これは実に稀有なことといわなければならない。戦国の城と近世の城の両方を同時に見ることが出来る城は滅多にない。

### 月山富田城の全景

月山富田城は標高197mの月山山頂に主郭部を設け、尾根上に大小多数の曲輪を配した複郭式山城である。現在、城郭跡は国の史跡に指定されている。



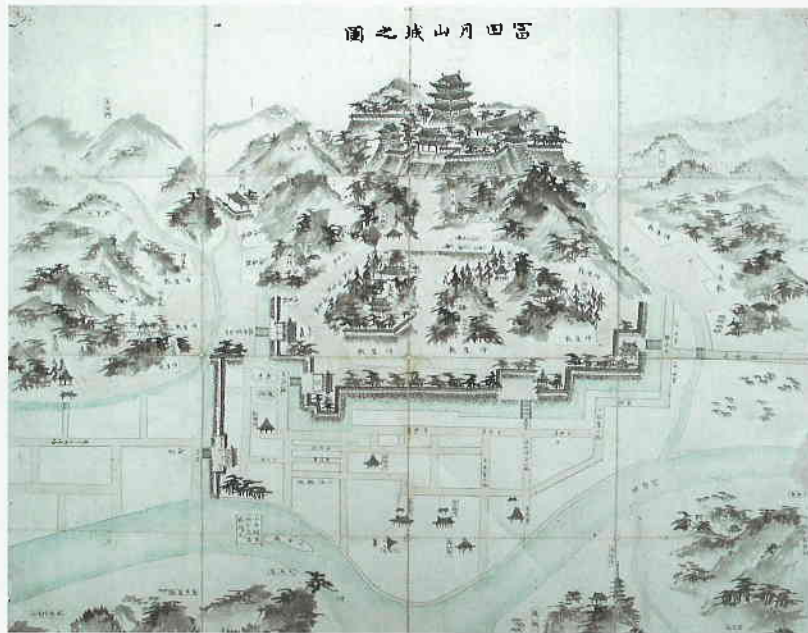
### 三日月に祈る山中鹿介像

月山富田城内の「太鼓壇」に建つ。「願わくは、我に七難八苦を与えたまえ」と、三日月に主家尼子家再興を祈つたという逸話がモデルになっている。



### 月山富田城の歴史

保元・平治頃(1156~1159)	平兼清が築城か
応永2年(1395)	出雲国守護代・尼子持久が入城。以降、尼子義久までの170年間、尼子氏6代の居城となる
天文11年(1542)	第一次月山富田城の戦い(尼子vs大内・毛利連合軍)
永祿8年(1565)	第二次月山富田城の戦い(尼子vs毛利)
永祿9年(1566)	尼子氏が毛利に破れ、間城も毛利領に
慶長5年(1600)	堀尾忠氏が城主に
慶長16年(1611)	堀尾忠晴が松江城に移り廃城
昭和9年(1934)	国の史跡に指定される
平成18年(2006)	日本100名城に選定



## 富田月山城之図

古図は、近世城郭へと造り替えられた月山富田城を描くが、急勾配を巧みに利用した縄張りだったことが分かる。図中央には、山中御殿から山城部分に上がる尼子時代の遺構、「七曲り」が見える。安来市教育委員会蔵

名城  
ポイント  
2廃城時の遺構が現存し、  
往時の面影を伝える奇跡的に「破城」を逃れ、  
尼子時代の遺構が残る

月山富田城の魅力のもう一つは、廃城時の遺構がほぼそのまま残っている点である。

堀尾吉晴・忠氏父子は、一度、月山富田城を居城とし、近世城郭を造りはじめたが、城の位置が内陸で交通が不便なこと、また、出雲・隠岐24万石の大名として、城下町を造るには狭いことなどから、新しく松江城を築き、そこに移っていくことになった。慶長16年（1611）のことである。

そのころ、城主は3代目の堀尾忠晴になっており、月山富田城の役目は終わった。ただ、その段階では支城として残されたものと思われるが、支城主の名前は伝わっていない。結局、その4年後の元和元年（1615）に「一国一城令」が出され、月山富田城は廃城となった。

ここで注目されるのは、廃城時の堀尾氏による処置である。廃城となった城は、破城といつて、城として使えなくなるよう壊すのがふつうで、石垣を崩したり、堀を埋めたりするのが一般的である。ところが、月山

## 京羅木山を臨む

月山富田城の向かいにそびえる京羅木山。尼子氏と敵対した大内義隆、毛利元就が同城を攻める際にこの山に陣地を構えた。



富田城では破城の痕跡が見つからない。堀尾氏は、どうも積極的に壊さず、そのまま放置した可能性が高い。そのため、現在、廃城時のつまり、城として使われなくなり、放置されたままの状態を目にすることができるというわけである。

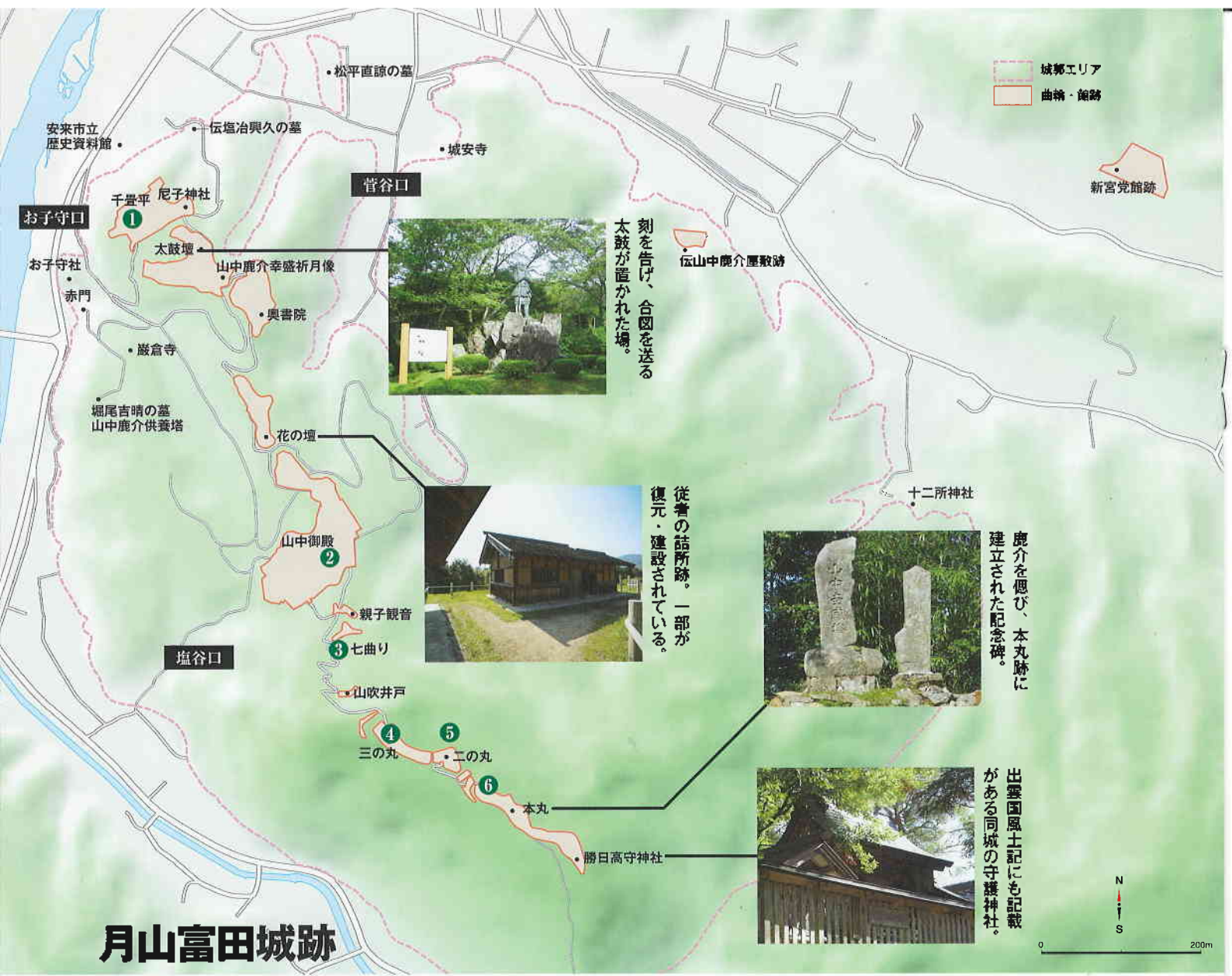
山上の、本丸・二の丸・三の丸の戦国城郭の部分は、虎口などを含め、そのまま残っている。もちろん、二の丸および二の丸の石垣は吉川氏、堀尾氏による改修であるが、本丸と二の丸の間の堀切は尼子氏時代の遺構で、山中御殿から山城部分に上が

る七曲りも、尼子氏時代のものである。本丸および二の丸からの眺望もいい。近くに京羅木山、遠くは中海さらに美保関まで臨むことができる。山中御殿は尼子氏時代も居館として使われていたと思われるが、堀尾氏時代、つまり近世城郭としての月山富田城の中枢部だったところで、菅谷口から山中御殿に入る虎口の石垣はみごとである。

山中御殿の並びに花ノ壇とよばれる曲輪があり、発掘調査によって堀立柱建物跡3棟と柵跡などが見つかっており、このうち、2棟の建物が復元されたおり、そのあたりから眺める山城部分は、いかにも戦国の山城といった趣がある。

花ノ壇曲輪の北に太鼓壇とよばれる一画があり、これも曲輪となっている。そこには尼子家再興に生涯を賭けた山中鹿介の銅像が立っている。ちなみに山中鹿介は「鹿之助」と書かれることがあるが、当時の文書は鹿介である。名乗りは辛盛といった。

月山富田城の城域で、城下が一番近いところが千畳平で、ここも広大な曲輪である。千畳平の縁の部分が発掘調査され、そこから、堀尾氏時代のものとは異なる石垣が姿をあらわし、天正19年（1591）に入城した吉川広家時代の石垣ではないかと考えられ、鯨瓦を載せた櫓があった可能性もあり、今後の整備が期待される。



# 月山富田城跡



刻を告げ、合図を送る太鼓が置かれた場。



従者の詰所跡。一部が復元・建設されている。



鹿介を偲び、本丸跡に建立された記念碑。



出雲国風土記にも記載がある同城の守護神社。



⑤ 二の丸石垣

石垣は吉川氏や堀尾氏による改修。二の丸は水や食糧を蓄えていたという。



③ 七曲り

山中御殿から山頂へと上がる軍用道。険しく狭い尾根筋が主郭部を守る。



① 千畳平

兵らが「勢揃い」する広場。巨大な石垣は城下町からも見ることができる。



⑥ 二の丸と本丸の間の堀

攻撃兵の進撃を防ぐために設けられた曲輪の間に切った堀（堀切）。



④ 三の丸虎口

曲輪の出入り口である「虎口」は、尼子時代からの遺構がそのまま残る。



② 山中御殿

堀尾吉晴が壮大な居館を造営した場所。菅谷口側の虎口に残る石垣は必見。

つわもの  
兵たちが勇躍した  
戦国合戦史の主要な舞台



尼子経久と山中鹿介

山中鹿介ら尼子復興に努めた10人の勇士「尼子十勇士」は、晴久の代で活躍するが、本図では、経久と十勇士が描かれる。「尼子十勇士絵巻(部分)」(城安寺所蔵)

尼子対大内、対毛利による  
中国全土をかけた2度の激戦

月山富田城の魅力として、私が三つ目あげるのは、城が、尼子対大内の戦い、尼子対毛利との戦いといった、わが国を代表する戦国大名の合戦の舞台になっていた点である。城を攻める側からすれば攻城戦、守る側からすれば籠城戦の、二度にわたる戦いが月山富田城でくりひろげられていた。

尼子氏は、稀代の英傑といつてよい経久が天文10年(1541)11月に没したことで、ややかげりが見えはじめた。その前に子の政久が死んでおり、経久の孫にあたる晴久の時代となっていた。

ちょうどそのころ、次第に力をもってきたのが大内義隆であった。尼子氏についていた部将たちの中から大内氏に属す動きが見られはじめたのである。特に、尼子氏と大内氏と



の勢力の境界にあたる安芸・備後および石見の国衆たちの中に顕著であった。

そうした動きを好機と見て、翌天文11年正月11日、大内義隆は自ら大将となって山口を出陣した。その数1万5000という。まず、厳島に渡り、そこで戦勝祈願をし、4月に出雲に攻めこんでいる。ところが、途中の尼子方の城を落とすのに思いのほか時間がかかり、尼子晴久の本城である月山富田城の近く三刀屋に到達したのは10月のことであった。

義隆が月山富田城の向かいの京羅木山に本陣を置いたのは何と翌天文12年(1543)1月のことであった。

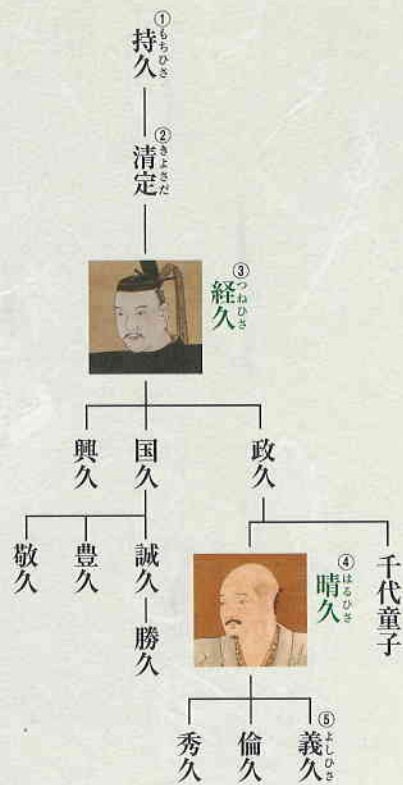
ふつうならば、そこですぐ城攻めがはじまるところであるが、尼子方の三刀屋久扶・三沢為清・木城常光らの調略に時間がかかってしまったため、すぐには戦いにならなかった。理由はもう一つあり、そのころ、大内方で、城攻めの方法をめぐる意見

対立があったのである。一つのグループは陶隆房(のちの晴賢)らの急進論で、もう一つは毛利元就らの漸進論であった。元就は、月山富田城が地形を巧みに使い、しかも天險の要害で、力攻めでは落とすのがむずかしいとみて、持久戦を主張した。

大内義隆にしてみれば、陶隆房は周防の守護代で譜代家臣でもある。それに対し、元就は、尼子方から寝返ってきたいわば外様家臣なので、隆房の意見を採用し、3月14日、大内軍による総攻撃がはじめられ、城の北西首谷口で戦いとなった。しかし、元就がいつていたように、城は難攻不落の堅城で、大内軍は城の中に攻め込めない状況が続いた。

こうした一進一退がくりひろげられていた最中の4月晦日、それまで尼子方から大内方に寝返ってきて、大内方の陣営にあった三刀屋久扶・三沢為清・木城常光といった出雲の部将たちが、首に月山富田城に入っ

# 尼子氏略系図



経久の時代に戦国大名として独立した尼子氏  
は一大勢力を築くが、晴久の時代に大内氏が  
台頭。義久が毛利に降り、勝久の自害によっ  
て滅亡する。尼子経久像／広島倉庫山洞光寺所蔵、尼子  
晴久像／山口県立山口博物館所蔵

天文12(1543)3月、晴久・新宮党(経久の次男国久が率いる精鋭部隊)ら尼子軍は、月山富田城の菅谷口で大内・毛利連合軍を迎撃。翌4月、三刀屋ら元尼子武将が再び尼子につき、義隆は敗走。



永禄8年(1565)4月、月山富田城の三方から攻め上がった毛利軍を義久率いる尼子勢が撃退。9月、再び同城を包囲した毛利軍は兵糧攻めを続け、疲弊した尼子勢は翌年11月に降伏、開城した。



この場合、撤退はイコール敗北であり、5月7日、大内軍は京羅木山の本陣を撤し、石見路をとって山口へ逃げもどっている。義隆は無事にもどったが、養嗣子の大内晴持は、敗走途中、乗っていた船が転覆し、死んでしまった。このあと、義隆は全くやる気をなくし、それが大内氏衰退の要因となったのである。この戦いを第一次月山富田城の戦いと呼んでいる。大内氏衰退の要因を作ったのが月山富田城だったことは注目してよい。

そして、この城を舞台にもう一度大きな戦いがくりひろげられた。それが第二次月山富田城の戦いである。陶隆房の下剋上で大内義隆が殺され、隆房から晴賢と名を改めた陶晴

賢を厳島の戦いで破った毛利元就が大内氏・陶氏に代わって大勢力となり、次第に衰えはじめた尼子義久と戦いをくりひろげている。

永禄5年(1562)から、元就は「尼子十旗」とよばれる尼子方重臣たちの城を各個撃破し、同6年に尼子方の重要拠点だった白鹿城を落とすと、翌7年には月山富田城の包囲にかけ、城を孤立させ、ついに翌8年(1565)4月、元就は2万5000の大軍で、菅谷口・御子守口・塩谷口の三方から攻撃を開始している。山中鹿介と品川大膳が壮絶な一騎打ちを演じたというのはこの年9月の戦いするときである。

しかし、義久をはじめ、尼子方の籠城兵も頑強に抵抗を続け、城は容易に落ちず、とうとう永禄9年にもちこされてしまった。元就は兵糧攻めにきりかえたため、飢餓に悩まされた籠城兵が数千人ずつグループになって城を抜け出したりするようになり、士気は阻喪していった。

結局、その年11月21日、義久は元就に降伏を申し出、さしもの月山富田城は開城となった。この戦いによって、戦国大名としての尼子氏は滅亡した。かつて、中国一の太守であったその威勢は、そっくりそのまま毛利氏のものとなったのである。二度の戦いの舞台となった月山富田城がそのまま残っているのは奇跡といつてよい。